ほっかいどう 水曜生きる

木曜よむ・語る 金曜楽しむ 土曜考える 火曜学ぶ

けんこう処方箋

北海道柔道整復師会会長 萩原 正和

世界的大会の裏 ケガと勝負

世界三大スポーツイベントとされる大会のうち、二つが日本で開催される。2019年にラグビーのワールドカップ、20年には東京オリンピック・パラリンピックが相次いで開かれる。

世界中のトップアスリートが日本に集い、名誉をかけて試合に臨む。主役はもちろん選手であるが、これらの大会にも日本伝統治療である柔道整復師が活躍する裏の舞台がある。

選手は一瞬で勝負が決まる戦いに向けて極限まで体を酷使するため、練習から本番まで常に外傷と隣り合わせの生活だ。「休まずにケガをできるだけ早く治したい」「ケガをしても手術をせずに体を使いたい」。選手たちの願いだろう。

イラスト・佐藤博美

国家資格である柔道整復師は運動器の外傷を保存療法で施術するため、早期の競技復帰を望むアスリートのニーズと合致することが多い。手術や注射、投薬などをせずにケガと向き合う治療スタイルがいかに支持されているかは、年齢差なく整骨院に通院する選手たちを見れば証明される。

試合で多いケガは競技にもよるが、捻挫、筋挫傷、骨折。早期治療のためには保護、安静、冷却、固定、挙上が原則だが、これを理解しているアスリートも多く、冷却やテーピングをしている姿をよく見かける。

中には湿布だけでしのぐ選手もいるが、これでは不十分である。整骨院では原則にのっとり包帯やテーピングなどを用い、負傷時と同じ動作をさせないための固定を重要視する。こうすることで患部の安静と保護をし、三角巾などによる上肢の挙上や冷湿布などでの冷却を行う。更に物理療法と手技療法とを加え、治癒能力を最大限に引き出す。

治療を通して柔道整復師は、選手と共にケガと向き合い、選手と共に試合を乗り越え、選手を応援する。その治療技術と人とのつながりを大切にする日本独自の伝統治療法は、国籍を超え、世界のアスリートからも求められてきている。

その動きの一環として、東京オリンピック・パラリンピックで公益社団法人日本柔道整復師会は公式に組織委員会顧問会議の顧問メンバーとなった。また、アジア初となる日本開催でのラグビーワールドカップ、更に山口県で今夏開催される第23回世界スカウトジャンボリーでも同会の柔道整復師が関わる。

世界が注目する大会の開催中、すこし耳を澄ましてみて欲しい。もしかすると、外国の方から柔道整復術――「Judotherapy」という言葉が聞こえてくるかもしれない。